第 1 章

アフリカの政治・社会変動とイスラームの研究に向けて

佐 藤　章

要約

サハラ以南アフリカでは近年、イスラーム主義武装勢力の活動が活発化しているが、この動きは、「テロ」や紛争といった面にとどまらず、アフリカの政治と社会にとってイスラームがどのような存在であったのかを、歴史的かつ同時代的に検討することを要請している。本稿はこのような研究課題の持ちうる可能性と意義について論じる。また、この研究課題に沿うものとして、アフリカ諸国の独立運動におけるイスラームの役割を問う研究構想について述べる。

キーワード

サハラ以南アフリカ　イスラーム　政治・社会変動　体制変動　独立運動

はじめに

サハラ以南アフリカでは近年、イスラーム主義武装勢力の活動が活発化しているが、この動きは、「テロ」や紛争といった面での検討のみならず、サハラ以南アフリカの政治と社会にとってイスラームがどのような存在であったのかを、歴史的かつ同時代的に検討することをも要請しているのではないか――このような問題意識に立ち、アジア経済研究所では、2017 年度から、「アフリカの政治・社会変動とイスラーム」という名称の研究プロジェクトがたちあげられた。初年度は、助走的・準備的段階と位置付けられ、各委員が、文献サーヴェイ等などをとおして、担当する国や地域に関するイスラームの状況の把握につとめ、研究上の論点の探索も行った。この作業を踏まえ、2018 年度からは、さらに 2 年間の共同研会が実施される予定である。

本稿は、この研究プロジェクトの趣旨を述べるものである。前半では、このプロジェクトがいかなる研究上の背景に立ち、どのような方向性を目指すものかを記す。後半では、本プロジェクトにおいて、筆者個人が取り組もうとするテーマの構想を述べることにしたい。

第 1 節　「アフリカのイスラーム」という研究テーマの可能性

(1) サハラ以南アフリカの近現代政治史におけるイスラーム

サハラ以南アフリカには数多くのイスラーム教徒が居住する。サハラ以南アフリカに居住するイスラーム教徒の人口は、2009 年時点で、全世界のイスラーム教徒の 15.3%にあたる 2 億 4063 万 2000 人と推計されている［Kenney and Moosa 2014, 448］。この人数は、サハラ以南アフリカの総人口に対して 30.1%の比率を占める。サハラ以南アフリカでのイスラーム教徒の分布は均一ではなく、国によってはかなり小さな人口比率しか占めない国もあるが、サハラ砂漠の南側に位置するサヘルと呼ばれる地域を中心に、人口のほとんどがイスラーム教徒である地域も多く存在する。また、国家元首がイスラーム教徒である国も複数存在している。イスラームがサハラ以南アフリカで大きな存在感を持つ宗教であることはまちがいない。

近現代の政治史においても、イスラームが関与した重要な事象があった。ともに 19 世紀に展開されたスーダンのマフディー運動や、西アフリカに興ったトゥクロールの活動は、欧州列強などの外来の侵略者への抵抗運動の代表的事例といえるが、これらの運動はイスラームに強く立脚して組織されていたものである。独立を達成されたあとの時代に関しても、イスラーム法の施行やイスラームの改革主義運動をめぐる動きは、ナイジェリアやスーダンなどで、国家のアイデンティティに関わるような重要な政治課題として浮上した。

ただし、このような事例があるとはいえ、サハラ以南アフリカ全体をみわたした場合には、近現代の政治史においてイスラームが有する存在感は、あらゆる場所で常に卓越していたというより、どちらかと言えば、地域的ないし時代的に限定されたものであったというのが適切である。植民地化・植民地支配への抵抗運動には、イスラームに基づくものだけではなく、在来の信仰に基づくもの（例としてマジマジの反乱）、土着化したキリスト教（例としてキンバンギズム）の基づくもの、民族に基づくもの（例としてマウマウの反乱）などもまたあった。独立運動においては、サハラ以北の国々では、イスラームが強固な連帯の柱として前面に掲げられた事例（例えば、イスラーム、アラブ、アフリカを三位一体的な連帯のよすがとするエジプトのナセリズム）が知られるが、サハラ以南においては、イスラームを明示的に組み込んだ連帯のイデオロギーが独立運動の中核をなした事例は見当たらない。独立以後の時期でもまた、イスラーム法の施行やイスラームの改革主義をめ

ぐる問題は、該当する一部の国々を越えでるような、サハラ以南アフリカに関わる問題として展開することはなかった。

しかしながら、このような状況には、21 世紀に入り、一定の変化がもたらされているようにもみえる。それは、ほぼ同時期にイスラーム主義武装勢力の活動が活発化したためである。それらは、具体的には、ソマリア南部でのアッシャバーブ、ナイジェリア北東部でのボコ・ハラム、モーリタニア・マリ・ニジェールにわたる西アフリカのサハラ・サヘル地帯でのイスラーム・マグレブ諸国のアル･カーイダ（AQIM）という 3 つの組織である。これらの組織は、拠点が置かれた国だけでなく、周辺諸国にまでも国境を越えて活動範囲を広げており、広域的な性格を備えている。さらに、これらの勢力の封じ込めのために、各国政府だけではなく、アフリカの地域機構、アメリカやフランスといった域外大国、国連などが関与してきており、問題は国際的な側面を強めている。いまや、イスラームは、サハラ以南アフリカの政治を語る上での重要なキーワードに躍り出たといってもよい。

（2）提起される問題群

近年のサハラ以南アフリカでのイスラーム主義武装勢力の活動は、アフリカ研究に対していかなる問いを提起するだろうか。いわゆる、「テロとの戦い」に類する、国際安全保障に関わる論点については前項で言及したので、ここではそれ以外について述べてみたい。

まず考えられるのは、アフリカの紛争に関わる問いである。アフリカでは 1990 年代に紛争が多発したのち、21 世紀に入ってからは紛争の発生件数が顕著に減少した時期が到来した。図 1 は、サハラ以南アフリカ諸国で発生した主要な紛争の継続時期を示した模式図である。この図の 2005 年頃から 2010 年代初めにかけての空白が多くなっている期間が、この減少の時期にあたる。近年の 3 つのイスラーム主義武装勢力の活動のうち、ソマリアのアッシャバーブは 2004 年頃から活動が盛んになったが、それ以外のボコ・ハラムと AQIM の活動は、減少の時期のあとに活発化した。図では、それぞれナイジェリア（下から 2 段目）とマリ（一番下の段）がこれに該当する。この図からは、減少期以後に展開されている 6 例の主要な紛争のうち、半数にあたる 3 例が、イスラーム主義武装勢力が関与するものであることが確認できる。アフリカの紛争の今日的状況を把握するうえで、イスラーム主義武装勢力は不可欠な要素となっていると言えるだろう。

このことは、アフリカの紛争をめぐる状況に何らかの質的変化が生じていることを意味しているのだろうか。言い換えれば、「今後、アフリカでの紛争はイスラーム主義武装勢力によるものが中心となっていくのだろうか？」、「イスラーム主義武装勢力の活動に参加する人びとが、アフリカの中で傾向的に増え続けている現状があるのだろうか？」、といった問いの対象となるような事象が生じているのかどうかということである。イスラーム主義武装勢力の活動については、アフリカの紛争に関するこれまでの事例と知見に照らして、光が当てられる必要があろう。

次に、提起されうるのが、サハラ以南アフリカのイスラームをどう評価するかという問いである。サハラ以南アフリカでは数多くのイスラーム教徒が居住し、国民の大多数をイスラーム教徒が占める国も複数あるにもかかわらず、中東・北アフリカ地域などでみられてきたような改革主義的な潮流に立つイスラームの運動は、大きな動きとしてはみられてこなかった。イスラームの連帯に基づいて政治的主張を行うような「イスラーム政治」の動きもまた、目立った展開をみせてきたとは言い難い。近年のイスラーム主義武装勢力の活発な活動は、このようなこれまでの状況を一変させるものなのだろうか。すなわち、アフリカに今後本格的なイスラーム政治の時代が到来する兆しが、そこには現れているのだろうか。

さらに、いま述べたことと表裏一体をなして、サハラ以南アフリカにおいてこれまで、イスラームの改革主義やイスラーム政治の動きが目立ったかたちで展開されてこなかったのはなぜなのか、という問題も浮上する。植民地支配から独立後の今日に至るまでの 1 世紀あまりものあいだ、アフリカは激しい社会変化を経験してきた。その中で人びとは、生存の確保や価値観の実現などを追求して、政治的な期待や異議申し立ての心情を様々に抱いたはずである。その心情が涵養されるうえで、信仰や宗教実践が果たした役割は大きなものであったはずである。であれば、イスラームもまた、こういった心情の構築に大きく作用したに違いないのではないか。そうだとするなら、それらは具体的にどのように表出され、どのように政治の場で扱われてきたのだろうか。とりわけ、独立間もない国々にとって喫緊の課題である国家建設や国民統合に、イスラームはどのような位置を占め、どのように参画してきたのだろうか。

以上を整理すれば、近年のサハラ以南アフリカでのイスラーム主義武装勢力の動向を手がかりとして浮上してくるのは、国際安全保障に関わるカレントな問題だけでなく、サハラ以南アフリカの比較紛争史における位置付け、イスラームの改革主義的潮流の動向、アフリカの政治史・社会史におけるイスラームの位置付けといった論点である。これらは、現状に関する評価のみならず、過去と未来の政治・社会のあり方をも視野に入れた、総合的な研究を要請する問題群を構成することになろう。本研究プロジェクトの「アフリカの政治・社会変動とイスラーム」という名称は、まさにこのような問題群を想定して設定されたものである。

（3）研究動向

では、このような問題意識に立って研究を進めようとする際、どのような先行研究を利用できるだろうか。まず、研究動向をごく簡単に整理しておきたい。

「政治的イスラーム」や「イスラーム主義」といった論点を掲げた研究が、本研究プロジェクトの着想と深く関わるものといえるが、注目されるのは、これらの論点があまり意識的に取り組まれてこなかったとの指摘がなされていることである。

まず確認しておけば、サハラ以南アフリカのイスラームに関しては堅固な研究蓄積がある。アフリカへのイスラームの伝播が 11 世紀に遡ることから、それ以来今日に至るまでの長い期間を視野に入れた歴史研究が盛んに行われている（例えばその集大成のひとつとして Levtzion and Pouwels［2000］が上げられる）。また、人類学の立場からの研究も盛んである［Rosander and Westerlund 1997; Loimeier 2013］。さらに、植民地期から独立以後にわたる激しい社会変動のもとでのイスラームについて探究する研究も数多く発表されており（例として、Cruise O'Brien［1971; 2003］、Launey［1982; 1992］、 Brenner［1993］などが挙げられる）、これらの業績は現代政治研究のうえでも重要な文献である。

とはいえ、イスラーム政治をめぐる論点に関しては、研究者の間であまり意識的に取り組まれてこなかった状況があることが、文献からも垣間みられる。例えば、オックスフォード大学出版会から刊行された学部生向けテキストである『アフリカ史におけるムスリム諸社会』［Robinson 2004］をみると、イスラーム主義に関する記述はごくわずかであり、さらに勉強を深めたい読者に向けて紹介されている本も、1990 年代後半に刊行された『アフリカ的イスラームとアフリカのイスラーム：スーフィとイスラーム主義者の邂逅』［Rosander and Westerlund 1997］の 1 点のみにとどまる。2005 年に刊行された『サハラ以南アフリカにおける政治的イスラーム』［Gomez-Perez 2005］では、アフリカのイスラーム政治に関する研究はあまり行われてこなかったと編者らが序文で指摘している。ただ、この本をはじめ、Otayek et Soares［2009］など、イスラームと現代国家をめぐる論点を取り上げる研究が、近年、相次いで発表され始めているようである。

このように、イスラーム政治に関する研究が、2000 年代に入ってから本格的に着手され始めている状況の背景には、「9・11」事件を踏まえた、イスラーム主義に対する国際的な関心の高まりが背景にあるだろう。このことを裏付けるように、個別具体的に特定のイスラーム主義武装勢力に焦点を当てた研究文献は数多く発表されている。これらは、アフリカのイスラーム研究の主流を担ってきた歴史学者や人類学者が発信するものだけではなく（例えば、Harmon［2010; 2014］、Boilley［2012］など）、国際安全保障研究やテロリズム研究などの立場からの発信も盛んである（例えば、Larémont［2011］、Zenn［2015a; 2015b］、Zenn and Cristiani［2016］など）。これらの研究は、アメリカが主導する「対テロ」戦争の動向や、アル＝カーイダ、タリバン、イスラーム国といった勢力との関係などの情報を提供してくれる点で有益なものといえる。

また、「テロ」という見地からの関心には、アフリカの現地情勢を踏まえた理解に欠けがちだとの批判的立場を示す研究も発表されている［Dowd and Raleigh 2013; Solomon 2015］。これは地域の文脈を重視する地域研究の立場からの研究者にとって見逃せない重要な指摘といえる。

以上の研究動向を整理すると、イスラーム主義武装勢力そのものに焦点を当てたカレントな研究が数多く発表されているなか、より中長期的な視点に立ったイスラーム史ないし

イスラーム政治の研究が少しずつ蓄積され始めている状況がみられる。言い換えればそこには、カレントな動向を、2 つの意味での歴史――実際の歴史ならびに研究史――に接合する試みが着手されているようにみえる。本研究プロジェクトの目指す方向性も、この動向に棹さすものであるといえるだろう。

（4）日本国内での研究状況

次に、日本での研究状況をみてみることにしたい。本研究プロジェクトの最終成果は日本語での刊行を想定している（予定通りに進行すれば、2020 年度にウェブで公開される）ため、日本語で発表することにどのような学術的な意義があるのかもここで確認しておきたい。

まず、アジア経済研究所での研究活動についてみておくと、サハラ以南アフリカのイスラームをテーマとした研究会はこれまでに 1 件も組織されたことがない。この意味で本研究会は、当研究所にとって、新しい研究への挑戦という意味合いがある。

日本のアフリカ研究の世界では、イスラームを専門とする研究者が一定数存在する。そのほとんどが、人類学ないしイスラーム史の立場からのものである（たとえば、嶋田［1995］、坂井［2003］、苅谷［2012］など）。本研究会が志向するような、近現代の国家や政治のあり方に関わる問題意識に立つ研究は、明示的にはあまり行われてこなかったといえるだろう。例外的に、小川［1998］が、セネガルの国家を支えるムーリッド教団について詳しい分析を発表している。近年のイスラーム主義武装勢力の活動に関する報告は主に地域研究者によってなされており、アッシャバーブに関連しては遠藤［2015］、津田［2012］、ボコ・ハラムについては島田［2014］、AQIM については渡邊［2012］、佐藤［2017］がある。また、これらの組織のほか、マリで活動が知られている「マーシナ解放戦線」については坂井［2016］が報告を行っている。また、坂井［2017］が西アフリカでのイスラーム改革運動の歴史的背景について分析している。

日本での研究状況をまとめると、歴史研究と人類学に厚みがある一方、近現代の国家や政治に関わる研究は相対的に手薄であり、個々の武装勢力に関する報告は比較的活発になされている、というものである。これは前項でみた、海外での研究動向とよく似た傾向といえよう。日本を含めて世界的に、これからの研究蓄積が大いに期待される状況にあることがわかる。

（5）暫定的なリサーチクエスチョンと方向性

以上の 2 つの項で研究状況を整理したのをふまえ、本研究プロジェクトが具体的にどのような問いを通して研究を進めようとするのかについて、現時点での構想を示しておくことにしたい。そもそも、本研究プロジェクトの掲げるテーマは、研究分野を構成する基本的な論点や主要な先行研究が十分に整理された状態にあるとはあまりいえず、どちらかと

いえば、未開拓の領域として位置づけるのが適当なものである。ただ、研究を進める上では、なんらかの暫定的なリサーチクエスチョンが必要となろう。そこで本プロジェクトでは、1 年間の準備段階を踏まえ、今後 2 年間の方向性を次のように設定しておきたい。

本研究では、サハラ以南アフリカでの近年のイスラーム主義武装勢力の活動を出発点として、アフリカ地域研究に対して提起されている 3 つの問いに取り組むことにしたい。その問いとは、第 1 に、イスラーム主義武装勢力の活動が 1990 年代以降のアフリカでの紛争多発傾向にいかなる質的な変化をもたらしているのか、第 2 に、近年の動きはアフリカにおいてイスラーム主義ないしイスラーム政治の動きが本格化する兆しと捉えられるものかどうか、そして第 3 は、第 2 と表裏一体をなす問いであり、アフリカはイスラーム教徒が数多く居住する地域でありながら、これまでイスラーム改革主義やイスラーム政治の動きが目立った形で展開されてこなかったのはなぜなのか、である。

これら 3 つの問いに対して、今後の 2 年間の研究を通して一定の回答を示すことが目標となる。これら 3 つの問いに関し、主査が現時点において持っている大まかな仮説はそれぞれ以下のとおりである。これらの仮説をたたき台として、今後の研究会での議論が展開されることとなろう。

－第 1 の問い：イスラーム主義武装勢力の行動は、従来のサハラ以南アフリカの武力紛争と共通するものもある（拠点や地域の軍事的掌握、正規軍との交戦など）が、身代金目的の誘拐や民間人を狙った無差別自爆攻撃などは、これまでになかったものである。このような新しい行動は、対応する政府や国際機関の側に、単なる軍事的対応だけでなく、治安・警察面での対応を以前よりも要請することになっており、サハラ以南アフリカの安全保障をめぐる状況に変化をもたらしつつあると考えられる。

－第 2 の問い：これまでサハラ以南アフリカでイスラーム主義の動きが活発化して来なかったひとつの背景として、中東地域からの改革主義的な思想の流入が植民地当局により抑止されていたことが挙げられる。脱植民地化からすでに半世紀以上が経過し、さらにグローバル化のなかで人や情報の行き来も活発になっていることから、イスラームの改革主義的な思想がサハラ以南アフリカへ流入するペースは着実に増加していくことと考えられる。したがって、今後サハラ以南アフリカにおいてイスラーム主義の動きが徐々に活発化していくことは大いに考えられる。ただし、それがどの程度のスピードで進展することなのかは別途検討が必要である。そして、この検討課題は次の問 3 への対応につながることとなる。

－第 3 の問い：近年のサハラ以南アフリカで生じているイスラーム主義の動きは、国内政治の対立構図などと結びついたかたちで展開されているのが特徴であり、そのこと

からは単にイスラームの改革主義思想だけでは、イスラーム主義の動きが顕在化することの十分条件とはならないように考えられる。では、いったいどのような条件が揃えば活動が活発になるのか、事例研究を通じてのさらなる検討が必要となろう。また、イスラームに依拠する政治運動が起こりうる決定的な局面として、脱植民地化の時期が想定されうる。各国での独立運動において、イスラームに基づく組織化がどのように関与していたかは、サハラ以南アフリカでのイスラームと政治を考えるうえで注目される論点であり、本研究会でも、近年の動向とあわせて独立運動期の検討を意識的に行い、知見の蓄積に努めたい。

以上、本節では、本研究プロジェクトの趣旨について説明してきた。本研究はサハラ以南アフリカの政治を中心にアフリカ地域研究に携わってきた研究者によって組織されることから、その成果は、アフリカ地域研究へ貢献しうるものとなろう。また、願わくば、サハラ以南アフリカ以外の地域を対象としたイスラームに関連する研究との接点を確立することも発展的な課題として意識されるところである。また、研究会の趣旨に沿った短文やレポートなどが付随的な成果として随時発信されることになると考えられ、これらは、アフリカ地域、イスラーム、発展途上国全般に対する、広く一般読者層への知的関心に答えるものとなることが期待される。

第 2 節　アフリカ史研究におけるイスラームの位置

(1)「アラブの春」とサハラ以南アフリカ

次に本節では、筆者が、本プロジェクトの一メンバーとして取り組む問題関心について述べることにしたい。筆者の問題関心は、前節（5）で挙げた 3 つの問いのうち、とりわけ 3 番目の問いに関わるものである。「サハラ以南アフリカはイスラーム教徒が数多く居住する地域でありながら、これまでイスラーム改革主義やイスラーム政治の動きが目立った形で展開されてこなかったのはなぜなのか」というのがその問いであったが、この問いをとくに、独立運動の時期に焦点を合わせて検討したいというのが、筆者の問題関心である。まず、この問題関心のよりどころについて説明したい。

この問題関心は、2011 年頃から中東・北アフリカ地域を席巻した「アラブの春」をきっかけに意識されたものである。その当時、筆者が演者となった講義・講演の質疑応答の際に、聴講者からの質問として、「"アラブの春"のような出来事が、サハラ以南アフリカでも、今後、起こる可能性はあるか？」と問われることが何度かあった。このような質問に対しては、サハラ以南アフリカ諸国での民主化の波が 1990 年代にひとしきり完了済みであることを説明し、その意味において、サハラ以南での「春」はすでに到来済みである、と回

答していた。質問をされた方々はみな、サハラ以南アフリカ諸国がすでに民主化を経験しているという点についての知識がなかったようで、幸い、この回答で納得をしてもらうことができた。

ただ、「"アラブの春"のような出来事」の定義の仕方次第では、また別の回答が必要かも知れない――というのが、そのときに筆者が感じたことであった。「"アラブの春"のような出来事」を、なんらかの社会的な異議申し立てを契機に、長期間存続した権威主義的体制が崩壊や譲歩を余儀なくされる現象として捉えるならば、筆者の先般の回答でさしあたり過不足がないであろう。しかし、「アラブの春」を経験した国々のうちの一部（具体的にはチュニジアとエジプト）で起こったような、社会的な異議申し立てを通して、イスラーム主義に依拠する勢力が政治的主導権を確立する過程として、「"アラブの春"のような出来事」を捉えるならば、そのような出来事はサハラ以南アフリカの国々でいまだ起こっていないことである。イスラーム主義に依拠する勢力が政治的主導権を確立した事例は、（仮に「サハラ以南アフリカ」に含めるとして）スーダンとモーリタニアでみられたが、これらはいずれも、社会的な異議申し立ての帰結として生じたものではない。

筆者が抱いた以上の感想を、論理的に整理し直してみたい。「アラブの春」における抗議行動は、「組織やグループの違い、イデオロギーの違い、性別や年齢の違いを超えるかたちで、大勢の人びとが抗議デモに参加した」［末近 2018, 153］と表現されるものであったとされる。すなわち、社会的なうねりそのものは多元的な要素からなっており、イスラーム主義はそれらのなかのひとつにすぎなかったというわけである。このことを前提にすれば、抗議行動の果てになんらかの政治的帰結が到来するものとして、イスラーム主義政権の誕生という帰結は、あくまで、複数あり得る可能性のひとつなのだと位置付けられることになる。

この理解を踏まえれば、チュニジアとエジプトで起こったタイプの現象から、次の 2 つの局面を抽出できよう。すなわち、第 1 に、イスラームをひとつの要素として含む、多元性を備えた広範な異議申し立ての動きの存在、第 2 に、このようなタイプの異議申し立ての結果として、イスラーム主義に依拠する勢力が政治的主導権を掌握すること、である。これら 2 つの局面が今後サハラ以南アフリカで起こる可能性はあるか？。これまでには起こってこなかったのか？。起こってこなかったとして、それはなぜなのか？。これらの問いが、はじめに筆者が受けた問い――「"アラブの春"のような出来事が、サハラ以南アフリカでも、今後、起こる可能性はあるか？」――から導き出せるのではないか、これが、本研究会の構想と筆者本人の個別テーマの出発点である。

（2）独立運動への注目

さて、チュニジアとエジプトでの展開から 2 つの局面を抽出したが、2 つの局面のうち、第 2 の局面に該当する現象――多元的な異議申し立ての帰結としてイスラーム主義政権が

樹立されること――が、サハラ以南アフリカでいまだ生じていないことはすでに言及したとおりである。この局面が到来するかどうかは将来展望に関わることであり、これ自体重要な問いをなすといえるが、その前提として問うておくべきは、サハラ以南アフリカの近現代史を広く視野に入れたうえで、第 1 の局面に相当する出来事があったかどうか、またあったとしてそこでイスラームに依拠した勢力がどのように振る舞い、どのような結果を迎えたか、という問題であろう。

サハラ以南アフリカの近現代史において、多元的な異議申し立てが広範に生じた時期としては、植民地期の末期から独立にかけての時期と、1990 年代の民主化の時期が代表的である。それぞれの時期とも研究対象とすべきところであるが、本研究ではまず、時系列に沿い、独立に至る時期の検討から着手したい。

独立に至る時期のサハラ以南アフリカを俯瞰的に捉えれば、そこで実に多様な勢力が活動していたことが確認できる。当時のアフリカ人にとって独立は一様に大きなテーマであり、独立が希求されていたという点では共通していたが、独立までのスケジュールや独立のあり方などについては様々な志向性があり、それらはしばしば対立しもした。反植民地主義や即時独立を鮮明に掲げた勢力もあった一方で、独立を急がず、宗主国との関係維持を望む勢力もあった。独立後の国作りにおいて、社会主義をモデルとすることを志向した勢力がある一方で、資本主義陣営を志向する勢力があった。パンアフリカニズムに代表される、アフリカ内での広域的な連帯を志向する立場に対しても、これを最優先に考える立場もあれば、より長期的な課題として捉える立場もあり、相違がみられた。学生組織、労働組合、農民組合などの組織を基盤とした勢力もあった。また、特定の地域や民族に立脚した勢力もあった。

このように独立に至る時期のサハラ以南アフリカにおいては、きわめて多元的な政治運動・社会運動のうねりが存在していた。この多元性のなかで、イスラームはどのような形で関与していただろうか。サハラ以南アフリカ全域を視野に入れながらも、筆者としてはとくに、西アフリカに焦点を当てて今後この問題を検討していきたいと考えている。

（3）歴史記述におけるイスラームの位置付け

以上が研究の基本的な方向性であるが、それに先立ち、サハラ以南アフリカの近現代史のなかでイスラームがどのような論点を構成してきたかを確認しておくことが有意義な作業と思われる。この作業とは、言い換えれば、サハラ以南アフリカの近現代史において、イスラームがどのような位置付けにある存在として記憶･記録されてきたかの確認である。ここではそのために、歴史記述における取りあげられ方に注目してみたい。

サハラ以南アフリカの近現代を対象とする歴史記述のひとつの典型事例として、ここではアフリカ人の歴史家が広く参画して編集・執筆された『ユネスコ・アフリカの歴史』を取りあげたい。ここで参照するのは、1935 年から現在までを守備範囲とした第 8 巻『1935

年以降のアフリカ』［Mazrui 1993］である。同書におけるイスラームに関する記述の概要は、概ね次のように整理できる。

－独立闘争を整理した第 5 章（章タイトル"Seek ye first the Political Kingdom." 執筆者は Ali A. Mazrui）は、独立闘争にみられた特徴やそこに介在した諸伝統を論じている。諸伝統として挙げられるなかに、戦士の伝統、キリスト教の影響、非服従運動、武装闘争、革命と並び、「ジハードの伝統」（"The djihad tradition in African resistance" pp.115-116）が挙げられている。この箇所では、帝国主義的浸透への抵抗運動が、ソコト・スルタン国、マフディー運動、「マッド・ムラー」によって展開されたことが言及される。次いで、スーダンのマフディー運動、アルジェリアでフランスが施行した「人種隔離政策」への抵抗がイスラームに基づく動員を通して行われたこと、ナセルが、アラブ、イスラーム、アフリカという 3 つの円に基づいてエジプト革命を遂行する一方、イスラーム同胞団の活動には強く警戒する態度をとったことが紹介されている。

－北アフリカとアフリカの角地域での独立運動の展開を扱った第 6 章（章タイトル"North Africa and the Horn" 執筆者は Ivan Hrbek）に、この地域での解放闘争のイデオロギーについて論じた箇所がある（pp.155-159）。そこでは北アフリカのアラブ諸国には 3 つの主要なイデオロギーが存在しており、それはイスラーム、ナショナリズム、社会主義であったとされる。北アフリカ諸国の独立運動にとってイスラームが重要な役割を果たしたことが、この章の記述から再確認できる。

－西アフリカでの独立運動の展開を扱った第 7 章（章タイトル"West Africa 1945-60." 執筆者は Jean Suret-Canale と A. Adu Boahen）には、文化運動と宗教運動の役割に触れた節がある（pp.183-184）。ここでは、通信手段の発達によって普遍主義的な宗教がローカルな信仰を駆逐する展開を引き起こしたとし、もっともこれに当てはまるのがイスラームだとの指摘がなされる。ここではセネガルのムスリム同胞団について、植民地当局から猜疑の目でみられながら、その後植民地権力に組み込まれたという評価がなされ、その後になって、また別の同胞団（具体的にはハマリスト）が植民地当局から疑惑の目でみられるようになったと記される。ハマリストについて本章は、もともとは非政治的な組織だったが、迫害される中でアフリカ民主連合（RDA）のような当時の反植民地組織に接近していったと記される。西アフリカでの植民地期の動向を述べる中では、これらの教団が代表的な事例となることが確認できる。

－ネーション・ビルディングを主題としつつ、これを政治に関わる構造から分析した第 15 章（章タイトル"Nation-building and changing political structures." 執筆者は J. Isawa

Elaigwu と Ali A. Mazrui）では、多元社会における政治的動員の成功例として、ムスリムが 8 割を占めながらカトリックであるサンゴールが動員に成功したセネガルの例と、マイノリティの民族であり、かつキリスト教徒であったニエレレがムスリム人口の多いタンザニアのリーダーとして成功を収めた例が挙げられている（p.443）。この章のまとめの箇所では、「イスラームはセネガルとギニアとマリで統合の要素となったが、イスラムとキリスト教はナイジェリアで分断をもたらした」という指摘がなされる（pp.466-467）。この章でのこれら 2 箇所の指摘を総合すると、多元主義的な要素にもかかわらず統合が成功する場合と、多元主義的要素が分断をもたらす場合という 2 つの極を設定することができるかもしれない。これら 2 極の分岐については、本来、宗教は分断的であるのに、分断の効果を抑止する何らかの要素があるという論理で考えるべきなのだろうか。いずれにせよ、宗教の問題をアフリカ近現代史のなかで考えていく場合には、国民の統合と分断という視点が欠かせないものであることが本章から理解できる。

－同じくネーション・ビルディングを主題とした第 16 章（章タイトル"Nation-building and changing political values." 執筆者は Joseph Ki-Zerbo、Ali A. Mazrui、Christophe Wondji）は「政治的価値」という観点から分析している。端的には主義、信条、イデオロギーなどの価値観にかかわる側面をまとめた章である。ここでイスラームは、ナショナリズムに関連する広義の文化という観点から取り上げられている。例としてはマフディー運動が、「宗教を基盤としたナショナリズム」と指摘されている。ここでもまた、「マッド・ムラー」に言及されている。西アフリカでも同様の運動が間欠的に発生したとされ、事例としてはアマドゥ・バンバとハマラーが挙げられている（pp.475-476）。

－これら以外の章についてまとめて整理しておくと、まず、「宗教と社会進化」と題した第 17 章に「イスラームと近代化」と題する節がある（pp.510-516）。また、教育と社会変化を扱った第 22 章にイスラーム教育の話が出てくる（pp.682-684）。「パンアフリカニズムと解放」と題した第 25 章は、外交的な連帯の問題を扱った章で、その中に「パンアフリカニズムとパンアラビズム」と題する節がある（pp.760-766）。

さて、『ユネスコ・アフリカの歴史』第 8 巻でのイスラームに関する記述を概略したが、ここから、サハラ以南アフリカの近現代史におけるイスラームの位置を把握するうえで重要ないくつかの知見が導き出せよう。

まずは、アフリカ全体において、イスラームそのものが独立に向けた原動力ともいえるほど強い力を振るったのは北アフリカとスーダンぐらいだとみておいてよいことである。また、このことと表裏一体のこととして、それ以外のアフリカ諸国（大部分がサハラ以南

に位置する）においては、イスラームは国全体の独立に向けた動きとしては結実せず、個別の運動として、もしくは、諸派が合流した独立運動における一要素として、各国ないし各地域での歴史に関与したというかたちで、捉えておいてよさそうだということである。この知見は、イスラームが政治の前面に出てくるような動きはあまりみられなかったとする、第 1 節（1）で記した見方を裏付けてくれるものといえるだろう。

さらに、この本から得られるもうひとつ重要な点は、イスラームという主題が、政治運動を支える思想や価値観に関わる問題として認識され、論じられてきた点である。これは、ネーション・ビルディングという論点に関して 2 つの章が当てられ、そのどちらにおいてもイスラームに言及がなされていることから確認できる点である。先に述べたように、サハラ以南アフリカでの独立運動には実に多様な要素が参画したのであったが、そのことが意味するのは、多元性を備えたかたちで独立が達成されたということと、それゆえ独立後の国としてのまとまりが維持・確立することが大きな政治的課題となったということである。「国のまとまり」の維持のため、いくつかの国が強権的な統治に傾いていったことはよく知られているが、こういった物理的な暴力の問題だけではなく、思想や主張を通しても「まとまり」が――その成否はさておき――追求されたことは再確認しておくべき点である。そして、イスラームはその追求に関わる重要な主題であったわけである。すなわち、イスラームは、サハラ以南アフリカの近現代史において、政治思想やイデオロギーをめぐる領域に強い存在感を持つ事象として捉える必要があろう。

また、そのほかの個別の検討領域としては、宗教、教育、外交という柱を立てられることも確認できる。これらの個別検討領域が、政治動向にどのように関与するかも、今後の要検討点となろう。

むすび

以上、本稿では、アフリカの政治・社会変動とイスラームをめぐる研究プロジェクトの趣旨を述べるとともに、その中で主査が設定している個別研究の方向性について、主に基本的な問題関心を説明してきた。また、これを通して、研究プロジェクトの 2 年度目となる 2018 年度に向けた、出発点の再確認が行えたものと考えている。

むすびとして、本報告書の以下の章について簡単に触れておきたい。以下の章は、本研究プロジェクトの初年度の活動に参加した委員による研究報告である。本年度は準備段階のフェーズということもあり、各委員は、担当する国を対象として、イスラームの歴史、実情、論点などについて、各人の研究関心に基づく傾向に沿いながら、文献サーヴェイを実施した。その成果を整理したのが以下の各章である。ここでは、南アフリカ、モザンビーク、ケニア、中央アフリカ共和国が取りあげられている。準備フェーズの成果とはいえ、

各章は、これまで日本語の文献でまとめて紹介されることのなかった情報を数多く盛り込んでいる。アフリカ諸国のイスラームの状況に関心のある方々にに、ぜひご参照いただければ幸いである。

参考文献

【日本語文献】

遠藤貢 2015.『崩壊国家と国際安全保障―ソマリアにみる新たな国家像の誕生』有斐閣.

小川了 1998. 『可能性としての国家誌―現代アフリカ国家の人と宗教』世界思想社.

苅谷康太 2012.「19 世紀後半における西アフリカのイスラームと王権―アフマド・バンバの政治権力観とその思想的連関網」『アジア・アフリカ言語文化研究』（83）59-88.

坂井信三 2003.『イスラームと商業の歴史人類学―西アフリカの交易と知識のネットワーク』世界思想社.

――― 2016. 「マリのイスラーム過激派組織「マーシナ解放戦線（Le Front de libération du Macina, FLM）」の社会的背景」『Radical Islamist Research Report』（1）

――― 2017. 「イスラーム改革運動の歴史的展開――仏領西アフリカと英領ナイジェリアの教育改革の比較から――」『Radical Islamist Research Report』（8）

佐藤章 2017.「イスラーム主義武装勢力と西アフリカ――イスラーム・マグレブのアル＝カーイダ（AQIM）と系列組織を中心に――」『アフリカレポート』（55）1-13.

末近浩太 2018.『イスラーム主義――もう一つの近代を構想する』岩波書店.

島田周平 2014.「ボコハラムの過激化の軌跡」『アフリカレポート』（52）51-56.

嶋田義仁 1995.『牧畜イスラーム国家の人類学―サヴァンナの富と権力と救済』世界思想社.

津田みわ 2012.『ケニアからみたソマリア問題』『アジ研ワールド・トレンド』（205）30-32.

渡邊祥子 2012.「マグレブのアル＝カーイダとその射程――「アラブの春」とサヘルをめぐって――」『アジ研ワールド・トレンド』（205）10-13.

【外国語文献】

Boilley, Pierre 2012. “AQMI et le terrorisme islamique au Sahel: Isolement ou enracinement?” In *Islam et sociétés en Afrique subsaharienne à l'épreuve de l'histoire: un parcours en compagnie de Jean-Louis Triaud*. dir. Odile Goerg et Anna Pondoupoulo. Paris : Karthala, 379-389.

Brenner, Louis ed. 1993. *Muslim Identity and Social Change in Sub-Saharan Africa*. London: Hurst & Co.

Cruise O'Brien, Donal B. 1971. *The Mourides of Senegal : the Political and Economic Organization*

of an Islamic Brotherhood. Oxford: Clarendon Press.

——— 2003. *Symbolic Confrontations : Muslims Imagining the State in Africa*. London: C. Hurst.

Dowd, Caitriona, and Clionadh Raleigh 2013. "The Myth of Global Islamic Terrorism and Local Conflict in Mali and the Sahel (Briefing)." *African Affairs* 112(448) : 489-509.

Gomez-Perez, Muriel dir. 2005. *L'islam politique au sud du Sahara: Identités, discours et enjeux*. Paris: Karthala.

Harmon, Stephen 2010. "From GSPC to AQIM: The Evolution of an Algerian Islamist Terrorist Group into an Al-Qa'ida Affiliate and Its Implications for the Sahara-Sahel Region." *Concerned African Scholars Bulletin* No. 85(Spring): 12-29.

——— 2014. *Terror and Insurgency in the Sahara-Sahel Region: Corruption, Contraband, Jihad and the Mali War of 2012-2013*. Surrey and Burlington: Ashgate

Kenney, Jefferey T. and Ebrahim Moosa eds. 2014. *Islam in the Modern World*. London and New York: Routledge.

Mazrui, Ali A. ed. 1993. *General History of Africa VIII: Africa since1935*. Paris: UNESCO, Oxford: Heinemann Educational, Berkerly: University of California Press.

Larémont, Ricardo René 2011. "Al Qaeda in the Islamic Maghreb: Terrorism and Counterterrorism in the Sahel." *African Security* (4): 242-268.

Launay, Robert. 1982. *Traders without Trade: Responses to Change in Two Dyula Communities*. Cambridge and New York : Cambridge University Press.

——— 1992. *Beyond the Stream : Islam and Society in a West African Town*. Berkeley: University of California Press.

Levtzion, Nehemia, and Randall Pouwels eds. 2000. *The History of Islam in Africa*. Ohio University Press.

Loimeier, Roman 2013. *Muslim Societies in Africa: A Historical Anthropology*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.

Otayek, René, et Benjamin Soares dir. 2009. *Islam, Etat et Société en Afrique*. Paris: Karthala.

Robinson, David 2004. *Muslim Societies in African History*. Cambridge: Cambridge University Press.

Rosander, Eva Evers, and David Westerlund eds.1997. *African Islam and Islam in Africa: Encounters between Sufis and Islamists*. London: Hurst & Company.

Solomon, Hussein 2015. "Critical Terrorism Studies and Its Implications for Africa." *Politikon* 42(2): 219-234.

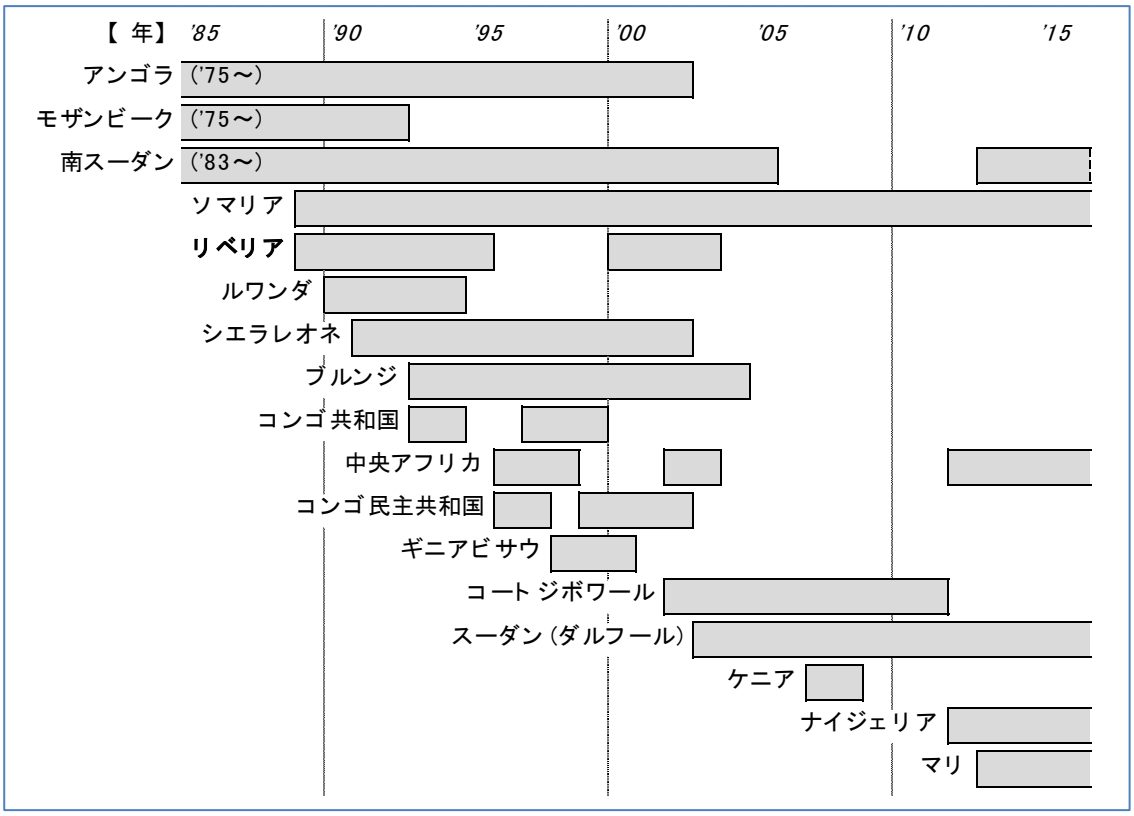
Zenn, Jacob 2015a. "Islamic State and West Africa." *Terrorism Moniter* 13(24): 28-31.

——— 2015b. "The Sahel's Militant 'Melting Pot': Hamadou Kouffa's Macina Liberation Front (FLM)." *Terrorism Moniter* 13(22): 3-6.

Zenn, Jacob, and Dario Cristiani 2016. "AQIM's Resurgence: Responding to Islamic State."

Terrorism Moniter 15(5): 5-8.

図 1　サハラ以南アフリカ諸国で発生した主要な紛争の継続時期



（出所）筆者作成。